

「エリコ教」

作 サカイリユリカ

登場人物

ボク

エリコ

ミナ

客

舞台美術

何もない空間に ポツンと ロッキングチェア（揺り椅子）が1つ。
壁に、窓を想起させる木のフレームと、白い布がカーテンのようにかかっている。

【プロローグ】

薄ぼんやりとした室内。

舞台中央手前側に、ロッキングチェアが揺れている。

徐々に明るくなっていき、そこに男が寝そべっているのがわかる。

男、椅子に身を預けて揺られながら、微かに手足を動かしている。

次の瞬間、けたたましいベル（あるいはブザーのような音）が空間に鳴り響く。
女、舞台奥から影がこぼれるかのように静かに現れ、ゆっくりと部屋を見渡しながら窓際の方に歩いていく。

いつの間にか音は鳴りやんでおり、無音の時間が訪れる。

女、窓の向こうを眺めている様子。

ボク （少し上ずった声で）・・・来てくれたんだね

エリコ （ゆっくりと振り返り）しーっ。

ボクとエリコの間には、そして部屋に流れる時間は膨張し、次第に影を色濃く落としていく。

エリコ ねえ

きつと、もうすぐ陽が差す頃だと思いの、

だってほら・・・

だんだんあなたの顔が、はっきり見えてきた・・・

（エリコ、ボクの名前を呼ぼうとするが、はっきりとは聞こえない）

ボク こちらからはよく見えないよ

エリコ 見えているでしょう

ボク すぐくまぶしいんだ 目がつぶれそうなくらい

エリコ・・・そうね、

でもわたし もっと明るいとところで・・・あなたを見たいわ。

エリコ、ボクのすぐ傍に来ている。

自分のはめていた腕時計を外し始める。

その時計は次の瞬間、「カチリ」と音を立ててボクの手首に収まる。

エリコ お誕生日おめでとう

(はにかんだように微笑みあう2人)

ボクはいつの間にか泣き笑いをしている。

エリコ、まるでワルツを踊るかのようにはゆっくりとボクの両の手をとり、
ボクはそのままゆっくりと立ち上がる。

そのままエリコに導かれるようにボクはエリコにおぶさる。
ボクをおぶったまま、エリコは部屋をゆっくりと一周する。

ゆるやかに暗転していき、溶暗――

【エリコ／1】

ボクはロッキングチェアの上で目を覚ますと、隣にいるはずのエリコを手探りで探すが、
そこには誰もいない。

ボク ……

エリコが姿を見せる。

エリコ もう起きていたの

ボク あ

エリコ 今日はいい天気よ

ボク ……最近よく眠れないんだ

エリコ そうよね、なんだかあなた顔色が悪いもの

ボク わかったんだよ 目を閉じると 君が目の前からふっと消えてしまう

それが怖いんだよ

だから目を閉じたたくないんだ 閉じられないんだ

エリコ 私はよく眠れているわ

ボク うん、そうだね、そうなんだけど君は目を閉じているだろ、

それも怖いんだ まるで死に顔をみているようで

エリコ 私の死に顔はきれいでしょう

今夜あなたの夢に出ていくわね

ボク 夢の中の君はどんな風に笑うんだろう

エリコ あなたがもし目を覚まさなかったら、わたしもずっと一緒に眠っていようかしら

ボク そしたら誰がボクを起こしてくれるんだい

エリコ ……(微笑む)

互いの存在を希求し、確認し合う2人。

ボクは寝そべったままゆっくりと手を伸ばす・・

何も言わなくても、エリコはしっかりとボクの手を握ってくれる。

その手をしっかりと握り返すボク。

ボク 着替えるよ

立ち上がっていこうとするのをエリコは静止して、

エリコはボクに傷がついていないか、身体中を入念にチェックする。

エリコ 痛い？

間。エリコとボクの視線が絡み、

次の瞬間、エリコはボクの足首をさすっつていて、

彼女の手にボクは手を優しく重ねる。

エリコ 何を考えていたの

ボク 君がいない間、ただ時間が過ぎるのを考えてた

エリコ それって素敵ね

ねえ この部屋、寒いみたい

ボク ああ、だいぶ冷えてる、

エリコ、無言でボクの服の中に手を入れる。ボクはその冷たさに身じろぎする。

エリコ みんなは気づいてないのよ。そうでしょ？

この世界でわたしたちだけしか分かっていない、ううん、

わからなくていいの 他の人たちは

ボク エリコ (言いながら服の中にある彼女の手を服の上からつかむ)

エリコ ばんざーい
ボク ばんざーい

ボクが万歳した拍子に、エリコはするりとボクの服を脱がす。
そして、ゆるりとボクの上半身に巻きつく。

エリコ カサカサしてる また寝ちゃったのね

ボク アタリ

エリコ あーあ、(香水をボクの服にスプレーする)

エリコは、エリコの匂いのするボクの服で、
ボクの体を丁寧に拭いてくれる・・・

エリコ 私が言ったこと、覚えてるわよね？

ボク ごめんなさい、ボクは馬鹿だ

エリコ あなた、まだ余計な記憶を持つてるからよ。だから覚えられないのよ。

これから、あなたを私に渡してくれるっていうんなら、今までため込んできたば
かばかしいものを、すべて頭から追い出して。
まっさらなあなたが欲しいの。

ボク ボクはどうしたら・・・

エリコ (微笑み) 大丈夫。安心して。私がぜんぶ忘れさせてあげる。

ボク はい。ボクはあなたのすべてを憶えます。

エリコ いいこね・・・

あなたが持つてるもの、教えてあげようか
あなたはね、なーんにも持つてないの、ただ、細胞のカタマリが息をして、空気
に触れて、ときどき休んで、生きてる体をなしてるだけなの。

ボク じゃあボクをボクにしてください。

エリコ あなた、わたしのことがわかるの？

ボク わからないから、君といたいんだと思います。

エリコ (ボクを抱きしめる) どんな気分？

ボク なんだか安心する

エリコ あなたが欲しかったものよね

ボク ……はい。

【ミナ／1】

突如、瞬くような照明の中、
扇情的なポーズのミナが躍り出る。
壁際に体を這わせるように動くミナ。
その動きに合わせて、カチカチカチ、とマウスが連続でクリックされる音が無機質に響いている。

ミナ、ロッキングチェアに顔をうずめ、全身をすりよせる。
ミナ、客が部屋に入ってきてからプレイに及び、客が帰るまでの一連の動作を繰り返して行っている。が、一周目、二週目・・・と行っていくにつれて微妙に動きに変化が生じてくる。

客の声 君 うまいね
かわいい声してるジャン
イイ体してるねえ
その髪型 好きだよ
よかったよ ありがとう

客の声は次第に洪水のようになり、そして消える。

ミナ いつからだろう 体の感覚が消えた
ううん、消した
あの女に身体をのつとられないために。

ミナ 気持ちイイことは好き。嫌いなんて言う人いるの？
だんだんあたし、自分のことがわかってきた気がする。
あたしは何が好きで、何が嫌いか。
それを客は教えてくれてる

ミナ バカだよねえ。「俺が一番お前のこと知ってたぞ」みたいな面しやがってさ。
思い込みだつづの。
誰があたしを一番知ってるかって、そんなのあたしに決まってんじゃないか

ミナ、鼻歌混じりに床に寝そべってタバコを吸い始める。
空に向かって吐き出される煙・・・くると客席に顔を向けるミナ。

ミナ　みんなが私に夢中になる。私もあのときだけは、相手に夢中になってるふりをして、相手を食べつくしちゃうの。
(タバコを排水溝に捨て)でもそれだけ。

魔法は3時になると解けてしまう。
あごのぶつぶつはまた増えだし、目の下は相変わらずクマが消えない。

だからメイク落とすの、嫌なのだ。
なんか消えちやう気がしてさ、今までの楽しかった時間とか・・・バカだね。
また明日には化粧ポーチ漁ってるっていうのに

客、登場する。

客　いいこだね　いいこだね

客、立ったままミナの頭の上に手をかざす。
ミナは起き上がってその手首を掴み、
客の手のひらを使って自分の頭を何度も撫でつける。
時計のアラームが鳴り響く。

客　いいの？

ミナ　わかってる　もう時間だよ

客、去る。

ミナ、再び床に寝そべって客席に背を向ける。
が、突如何かにおびえたように飛び上がる。

ミナ　誰!?

あたりを見渡すミナ。

ミナ　うふふ、お姉ちゃん！見てたあー？
あたしはねえ、「いいこ」になったでしょ？
だってみんな、ミナのこと「いいこ」だって言ってくれるもん。
いっぱい「いいこいいこ」してくれるもん。

でもさ、きつとお姉ちゃんが思ってるような「いいこ」じゃないよね今のミナは！
うふふふ、どんな気分かなあ？裏切られた気分？
これ、あたしなりの復讐だから。
もっともつとあたし、「いいこ」になるんだから。

ミナ、自分の身体を、そこにいるはずのないエリコに向かって挑発するように、見せびらかす。

【エリコ／2】

エリコとボク、ロッキングチェアに一緒に座り、シーソーのように揺れている。

エリコ もうどこにも行きたくないの

ボク うん

エリコ あなたは違う

ボク 君がそうしたいんならボクもそうする

間。

エリコ ねえ、素敵なことを考えた、

ここで、清潔で不自由のない、秘密の暮らしを始めよう。

ボク 隠れ家をつくるんだね

エリコ そうよ、隠れ家、

誰も寄り付かない、少し湿ったにおいのする隠れ家

ボク 頭がぼんやりする・・・

テレビをつけてくれないか

エリコ いらないわ

みて、あそこに映っているのはわたしとあなた

テレビをつけたら、その私とあなたが消えてしまう、

そんなのは駄目よ。

ボク ああ、そうか・・・

エリコ そんなことにも気がつかないなんてね

焦ることはないわ、時間はあるの

エリコ、ロッキングチェアに寝そべる。

ボクは、幼いころブランコ遊びをしたときのように、軽くロッキングチェアの背を押しては揺らしてやる。

ボク　ボクたちの間には、ある一定のリズムが流れていた。
そのリズムは心地よく、
ボクはそのリズムの中で目覚め、そして眠りについた。

エリコ　そうするのが当たり前みたいに
わたしたちはいつも一緒に
この部屋にまもられていた。
この部屋の居心地が良すぎて
わざわざ外にでるなんてこと
頭にも上らなくなっていた。

2人は何か秘密の話をしているかのように、耳打ちしあっている。
(客席にはセリフは聞こえない)

【ミナ／2】

客　ねえねえ君さ、髪、プリンになってるよ？

え、分かるってば。照明暗いからバレないと思った？

僕ちゃんと見てるから。見てるからね、君はさ、

ミナ　ねー、あのさあ、それイヤ

客　え？

ミナ　あたしのお、な、ま、え、呼んで？

客　ミナ、ちゃん？

ミナ　あたしはミナだけどミナじゃないんだよー

客　じゃあなんていうの？ミナちゃんじゃないの？

もしかして、僕にだけ、本当の名前、教えてくれるのかな？

ミナ　うふふ。特別だよおお。

♪ミツナはねえっ、サッチコってゆうんだホントはねっ
だあけえどお嘘吐きだから自分のことミツナってよつぶんだっよ
悲しいね　サッチヤン

客　ミナちゃんでしょ？

客　や　もう今日は帰るよ(と喋ってイスから降りようとする)

ミナ　(とっさに客の手首をつかむ)・・止めんなよ

ミナ、そのまま手首を引っ張り、客はミナに覆いかぶさるような格好になる。仰向けに寝転ぶミナ、赤子を抱き上げるかのように、腕をゆっくりと上げ、男の首に絡ませていく。その姿は何かに縫っているかのようにもみえる。

ミナ (男の首を掻き抱いて自分の胸に押し付け)

あたしはね、こうしている間が一番幸せなの。あたしを押し潰すくらい、ずっとこうしていて！

じゃないと、呼吸が止まりそうなの

ミナ、突き抜けたような嬌声をあげる。

客 君、泣いてるの？

ミナ え

客 なんだか、気持ちいよって泣いてるのか、嫌だよって、泣いてるのか
気になっちゃって。

ミナ 気持ち良かったよ

客 でも、すごく悲しそうな声だったな。

ミナ じゃあ、もっと気持ちよくさせてよ？

客とミナ、暗闇の中で絡み合う。

【エリコ／3】

下着姿のエリコとボク、2人。

エリコとボク、会話しながら部屋に入ってくる。

エリコ あれ今すぐ捨てて

ボク え

エリコ 早く

ボク でもあれは人からもらいもので

エリコ 聞こえなかったの

(ボクの髪をつかんで)

みてる？ちゃんと私みてる？

(急にパンツと手をたたく)

今！違うこと考えた！こつち！

わ・た・し！わかる

あっ

エリコ ねえ捨てて

ボク でも

エリコ じゃ、教えて 嫌な理由 言えないなら理由はないわ

ボク そうだけど

エリコ ね、新しいものって素敵じゃない？

ここにある家具も、食器も、着るものも食べるものもみんな新しくするの。
私たちが2人で選びなおすのよ。どう？だって2人のものなんだから

ボク ああ・・・

エリコ 鍵出して

ボク 鍵？

エリコ この鍵。いらなんでしょう、

ボク いらなかな

エリコ 必要ある？いらなんでしょう。

ボク (ぼんやりと) そうだね、要らないね。

ボクはポケットから玄関の鍵を取り出す。

エリコ、それを取ると窓から放り投げる。

エリコ ほら、どっか行っちゃった

ボク なくなったね

エリコ こわい？

ボク なんだか すがすがしいよ

間。

ボク エリコさん

エリコ さん付けはやめて

ボク エリコちゃん

エリコ それもいや

ボク エリコ

間。

エリコ あたしのこと、ちゃんと呼んで

ボク (おそろおそろ) エリコ

エリコ あなたの隣には私しかないじゃない

ね、何か話して あなたの声が聴きたい

ボク エリコ、エリコ、エリコ、エリコ、エリコ・・・

2人は、いつしか目を閉じている。

ボクは部屋の中を泳ぐように、ゆっくりと手探りで歩く。

彼のその姿は、お互いの存在にすがっているようにも、

天から降りてきた鎖をつかもうともがいているようにも、

母の乳房を手探りで見つけようとしている赤子のようにも見える・・・

ボク エリコの声も、匂いも、柔らかい体も、何もかもが

僕の幸せだった。

こんな風に自分でも驚くくらい、穏やかな気持ちになれたのは何故だろうか

彼女は僕の目の更に奥にある、何万光年も先のひかりを見つめているみたいで、

ボクはこのまま見られ続けていたい、

よく穴があくほどみるなんていうけど 穴ぼこだらけになったってかまうもんか

再び求め合う2人。

【ミナ／3】

ミナ、自分の親指を口に入れて強く吸い、指しゃぶりをしている。

部屋はティッシュの山。

よく見ると、丸められたティッシュはコンドームで縛られ、まるでてるてるぼうずのよう
になって転がっている。

マジックで、そのてるてるぼうずにマジックで顔を書いていくミナ。

ミナ あはは、みんなおんなじ顔おっ！

ミナ、舌先を突きだすと、そこにはティッシュか何かの白いかすが付着している。

ミナ まずっ。ったく、洗い足りなかったな。

チンカスくらい、自分でどうにかしとけっの

ミナ 私は男の身体をお世話する。
たぶん、あいつらの身体がだんだん動かなくなっても、こんな風にお世話されることはないだろう。
だから今、お世話してやる。

ミナ、綺麗にラッピングされたプレゼントの包装紙を、待ちきれないかのようにびりびりに破きながら開ける。
包み紙を外すと、そこには可愛らしいワンピース。
ミナ、うっとりとしてそれを見つめる。

ミナ ……かわいい。

あたしは、何度も、突き立てる、
あそこに、ナイフを、何度も、何度も突き立てる。
いつしかナイフはぴっちりとしたあしに納まるようになって
ねえ、もう痛くないね……？

ミナ、紙でできた着せ替え人形を取り出す。

ミナ これだけは、あたしのものなんだ
ミナ (人形に向かって)……聞いてくれる。
ごめ、そうだよ。疲れてるもんね。うんうんわかった、大丈夫、あとでまた、話すの楽しみにしてるから。楽しみにしてて。

客が入ってくる。

客 ねえ、それ、おもちゃ？

ミナ 違うよ

客 じゃあ、なに？

ミナ ミナのおともだち
客 そうかあ。じゃあ、ご挨拶しないとね。
こんにちは。はじめまして。ぼくはミナちゃんと…

(閉口する)

ミナ どうしたの？

客 いや、なんて言おうかなあって。

ミナちゃんは、どう思う？ぼくたち、こいび…

ミナ、その言葉嫌い。だって、恋人って絶対別れの時が来るでしょ。

あなたとはそうじゃない気がする。

客　　ありがとう。ぼく、ミナちゃんに、「ただの客の一人」って言われたらどうしようかってかっこ悪いけど不安だった、だからうれしい、そう言ってくれて

ミナ　嘘じゃないよ。大事な人にか、ともだち紹介しないもん。

客　　じゃあ、そのおともだちと一緒に、3人で遊ぼうか

ミナ　いや！

客　　どうしたの

ミナ　3人は嫌。2人がいいの。

もう1人はいららない。

客　　ミナちゃん？

ミナ　あたしだけを愛してよ

客、慈しむようにミナを抱きしめる。

【エリコ／4】

エリコが、裸足で。ペタペタと歩く音。歩いた跡に、乾いた泥のような足跡が点々と残る。

ボクは、エリコの歩いた足跡を、唇と舌で拭いて回る。

エリコの存在を慈しむように。愛おしい人の歩いた跡を、感じながら。

エリコの痕跡を少しでも自分の中のこせるように。

エリコ、歩きながらぶつぶつと独り言を言っている。

エリコ　私は下着を汚しません。

私は排泄をするとき、音をたてません。

私は死ぬとき、人の手を借りません。

エリコ、立ち止まり、

エリコ　おなかすいたでしょう

ボク　わからない

エリコ、懐からパンを1つ取り出す。

2人、1つのパンを分け合って食べる。

ボク　うっ・・

ボク、身体が食べ物を受け付けなくなっているのか、吐きだそうとしてしまう。

エリコ 食べないと死ぬわよ

エリコはボクの喉に無理やり流し込み、ボクはそれを飲み下す。

ボク これでボクはエリコと同じもので体が作られるんだよね

お揃い 嬉しいな君とお揃い

ボク エリコになら・・・殺されてもいいとさえ思った・・・

呼吸するのが当然のように、呼吸しなくなるのもまた、自然なことに思えたからだった・・・

ボク あのさ、

エリコ どうかした

ボク オシッコ、したいんだけど

エリコ うん

ボク いや、だからね

エリコ さっさとしたら？

ボク その・・・外でしたいんだ

今更なに恥ずかしがってるのよ あなたの音なんて聞き飽きてるくらいよなんてことないわ

ボク そういうことじゃないんだ、

とにかく、外にいつてくるよ

オシッコなんだからそう時間もかからない

なんなら窓からみてくれていたっていい

(窓の下を覗き込み) あっほら、あそこに植込みがあるだろ、

あのあたりでやるからさ、どうかな。

(つぶやくように) 逃げられるもんか、今更

(窓を開けて) ねえよく見て。ここから見えるのは何？あなたが行きたいのはあっちなの？

エリコ わたしがあなただの世界なんじゃない。

私は、世界の中にいる一人。

ボク それでも、たったひとりなんだよ、ねえエリコ

エリコ じゃあ、どこにもいく必要なんてないわよね

ボクは馬鹿だ

ボクは、窓際に立って、ズボンと下着を脱ぐ。

ボク　　みていてください。

ボクの放尿の音が静かに空間に響いている……。

【ミナ／4】

突如、ぎゅっとピンク色を凝縮したような、むせかえるような女の甘い香水の匂いがする
ようなハイな音楽が爆音で流れる。

ミナ、着せ替え人形に服を着せていく。

が、紙はぼろぼろで、頼りなく、人形の上に乗せた紙の服は、
ひらひらと床に落ちてしまう。

ミナ　裸になっちゃったね……？

あーあ、恥ずかしいね？こんなかつこして。

みんなから笑われちゃうねえ？

(突如耳を塞いで) 笑ってんじゃねえよ！

ためえに笑われるような生き方、してねえんだよあたしは！

ミナ、髪を洗っているような仕草。

ミナ　　ああ・・・あたし臭いな。

お気に入りのシャンプー、フローラルの香りで何回も洗ったのにな。

あたし、吐いたのかな・・・それとも、客のザーメンかな・・・

ミナ、自分で自分の身体を抱きしめる。

ミナ　　ゴシゴシ、した。何度も何度もゴシゴシした。

たっぷり泡立てた泡で優しく洗いましょうとか聞いたことあるけど、

そんなんで落ちないっしょ。いや、落ちてるのかもしれないけど、

洗ってる気しないっしょ。

お風呂場で一番最初に、あたしはあそこを洗う。

みんなそうだと思ってるんだけど。だって一番汚いじゃん。それにさ、小さい頃確か母親か先生だかに言われたもん。あそこは清潔にしようってさ！
・・わかった。お姉ちゃんのおそこも洗ってあげようか？

客が現れる。

客 ミナちゃんはくさくさなんかないよ

ミナ 人間だから臭いに決まってんじゃない。

あたし、汗っかきだし

客 でもそんなの、当たり前だよ

人間だから怪我したら血も出るし、泣けば鼻水も出るし、

ミナちゃんのおそこが濡れるから僕たちひとつになれるんだよ

ミナ あんた・・・最近ずつとくるね

客 おぼえてくれてたんだ

ミナ こんだけきてれば。それは。

客 今日も、よろしくね。

間。

ミナ あんたさ、なんて名前なの

客 僕はね、母親から名前でもらったことがないんだ。

それから、ぼくはね、いない人になったんだ。

いるんだけど、いないって、つらいことじゃないかな。

ミナちゃんもおんなじだよ。

いるんだけど、ミナちゃんは消費されるだけで、名前なんてなかなか覚えてもらえないでしょ？それともミナちゃんに入れあげてる客は他にもいるの？

客 ミナ いないよ。だいたいみんな名乗ったりしないもん。ミナの前で。

でもね、ぼくはちゃんとミナちゃんがこの世に生きてるってことをね、

覚えておきたいんだ。それにね、ぼくのことでも忘れないでほしい。

ミナ ミナは、物覚え悪いよ・・でも、だから、ちゃんと教えてくれたらいい。

客 何度でも教えてあげるからね・・。

客、ミナの頭を何度も優しくなでる。

【エリコ／5】

ボク 君はとっても綺麗だ。君を見ていると、この世にある美しいとされているものが、すべて汚らわしくさえ思える。

エリコ ねえ、止めてくれる？

からだの中がもう、いっぱいではち切れそうなの。

ボク どうしたらいいのかな

エリコ あなたと暮らせなくなるかもしれない

私、このままじゃあなたになぶり殺されていくわ

あなたと暮らすって、そういうことなのよ

ボクだって、毎日君のそばにいと死が迫ってきているような気がしている

エリコ 今日はずいぶんとあなた おしゃべりね

ボク そうかな なんにもしゃべれていない気がするんだけど

エリコ 届いているわよ

ボク ボクはここにいます？

エリコ あなたはいないわ ずっとね

ボク そっか

エリコ 自分がお留守 空っぽ

ボク 君が流れ込んでくるんだよ隙間なく

エリコ じゃあ、今あなたを切ってみたら、私が見えるのかしらね？

ボク 試してみるかい

エリコ 綺麗でしょコレ（ペーパーナイフを取り出し）

腕、巻くって

ボク はい

エリコ あなたの肌って傷一つないのね

エリコは、ボクの腕を慈しむように撫でた後、

手にしているペーパーナイフでボクの上に自分の名前を刻んでいく。

ボク （苦笑、あるいは悦楽の表情で）エ・リ・コ

エリコ わたし・・・そう、いろんなことを、忘れてしまいたいようで、

覚えていたいのには、頭がぼんやりして

もやのなかに包まれて・・・そして消えてしまう。

たまらないわ。こんなので耐えられない。

ボク (傷口を撫でながら) ここにエリコがいる・・・。

エリコ そんな風にね、あの女も傷つけてやりたいの

ボク え

エリコ あの出来そこないの女。

ひっかいて、傷つけて、そこにね、私のインクを垂らすのよ。

鮮やかな青と、瑞々しい赤、それにね、まぶしいくらいの太陽の色。

そのインクを傷口に流し込んで、身体中に模様を描いて、それはもう美しい、腕(かいな)にしてあげるの。

そうしたら私、あの子を愛してあげるわ。

ボク それはいつたい

エリコ あなたは知らなくていいの。

【ミナ／5】

客 ミナちゃんは、僕だけのものじゃないんだよね。それは分かってる。でも、僕を君の人生に刻み付けたい。「トクベツ」になりたい。

僕はさ、ミナを選べるけど、ミナは僕を選べないよね？

ミナ なにそれ？逆指名？ウケる！

ミナはさあ、お買い物とかランチとか旅行とか、そーゆー時間を捨ててここにきて、あんたとの時間を過ごしてるんだよ。それは、ミナが自分で選んでんの。

おカネのためじゃない、あんたみたいに求めてくれる人がいるから。

待たせてちゃ、悪いじゃん？

客 僕さ、ミナちゃんの人生の中で、一番ミナちゃんと一緒にいる時間、長くない？

最高記録じゃない？ねえ？

ミナ そーかな。

客 家族にはかなわないと思うけどさあ

ミナ かなって。

客 え？

ミナ いや、かなってよ。家族よりもさ、時間

客 え？

ミナ あたしの人生から、追いだしたい人がいるの。

永遠に「ツイホウ」して、ヒトカケラも残らないくらい、

消しちゃいたいんだ。

客 君の人生に僕の居場所はあるのかな？

ミナ わかんない。

でも、確実に、あたしの人生にあんたが現れてくれて、あの女を追いだせるんじゃないかって思ってる。だからもっと、あたしを支配シテ・・・あんたをあたしに刻んで刻んで、もう刻むとこなくなっちゃうくらい。くりぬいてくりぬいて、あんただけにしちやっつてよ。ねえ、最初からそうしたかったんでしょ？

客
それは

ミナ
あたし、あんたが好きよ。

客
ミナちゃんのこと、少しは分かってあげられたかな

ミナちゃん、これ、あげるよ。(札束を渡し)
ミナちゃんは気持ちいいと思ってこの仕事やってるんだろうけど、傷だらけだよ。傷だらけだ。だから、これ、包帯だよ。

ミナ
・・・これであたしの血、止まるの・・・？
あたしの痛みをあなたが共有してくれたからって、わたしが救われるわけじゃないんだよ。

客
僕は・・・

ミナ、痙攣するように笑いながら、イスに座る男に近づいていく。そして、そのままゆっくりと男の股間に手をのばし・・・暗転。
(その姿は天から下りてきた鎖を掴もうとしているようでもある・・・)

暗転の中でのミナのモノローグ。

ミナ
あたしはあたしを喋れなくする。
今にも叫び出しそうだから、奥まで、奥までくわえこんでフタをするんだ。
うるさく喚いたらイラつくよ？めんどいよね？
あたしもめんどいの。だったらこうしてた方がラク。

【エリコ／6】

エリコの膝の上に頭を垂れるボク。

ボク

・・・ひやくごじゆうにまん、よんひやくごじゆうにまんいち、
よんひやくごじゆうにまん、よんひやくごじゆうにまんさん・・・
よんひやくごじゆうにまんよん・・・

エリコ、僕の頭をずっと撫でている。

エリコ

ねえ、あなた、「補強」しないとね。

私から離れたら、あなたに何が残るの

ボク

ボクは、ボクで、ボクに・・・

エリコ

このままでいいの・・・

ボク

このままがいいよね・・・

エリコ

少し外がうるさいようだけど

エリコ

気にすることないわ（カーテンを閉めて）全部閉まってる

ねえ、この部屋で、何もかも忘れて、時間も分からなくなってしまふほどの

時間を過ごしたいって思うことある？

ボク

それって

エリコ

わたしね、自分が知らないことが増えていくのが怖い。

ここには「今」しかなくて、

それ以外がぜんぶ、水をかけられた蟻が一目散に逃げていくみたいに、

失せていってしまうのが怖い。

ときどき考えるの。あなたが死んだらって、ううん、死ななくても、あなたが

いなくなると、とてもあたしじゃ見つけれられない、

とおくの方へ隠れてしまつたら・・・

ボク

そんなことボクはしない

エリコ

しないわよね？

ボク

しないよ。ボクはエリコに、ここにずっと立っていてほしい。ずっとだよ。

エリコ

わたし、わたしのことが世界で一番嫌い。でもあなたが好きでいてくれる私なら、私も好きになれそう

間。

ボク エリコ、ねえ、いる？

エリコ いるじゃないここに

ボク そうだね、そうだよ

なんだか君がここにいない気がするんだ

エリコ どうしてそう思うのかしら

私、いろんなものをあなたにあげてきたよ。だって私はぜんぶあなたのものだ

から。ねえ、言っつて、何がほしいの

わたしたちに、あと、何が必要

ボク ねえ、ボクはもう必要ないの？

君はいつか死ぬ、ボクにもいずれ終わりが来る、

あとは消え去っていくだけだと思うと

いつそこのまま死んだ方がどれだけ幸せかと思う、

エリコ そんなのは嫌よ

ボク 君より先には死なないと思う

ここにいる限り安全で 死ぬリスクは減る

君に殺されなければね

エリコ ねえ、永遠というものを閉じ込めたいと思ったことある

私はあるの、

私が興味あるのはあなただけなのよ

愛がなんだっていうの

ボク 語ることではなかったね

ボクの悪い癖だ、いつも言葉にしようとして、

うまくいかない。

ねえエリコ、ボクはずっとある不安がつきまどっている。

エリコ こわいんでしょう 私に聞かれるのが

ボク こわいよ こわいんだ

ボクがどんなことをしたのか、ボクの全部を君に伝えるってことの

苦痛が君にはわかるかな

エリコ 聞かないから話して。

ボク 聞かないから聞かせて。

客 ミナちゃんってさ、どこ住んでるの？ずっとどこ？

ミナ やだ、夜這いでもしに来る気？

ミナはこっから出られないんだよ。

てか、出たくないの。ここが好きだから。

客 じゃあ、僕はミナちゃんのおうちに遊びに来てるわけなんだね？

なんか、同棲してるみたいだね

ミナ 一緒に住んでないじゃん

客 でも今は一緒にいるから。

ミナ あたし結婚とかしないよ。

客 別にプロポーズしてるわけじゃないよ。

ミナ 早くしようよ。ほら、服脱いで。

脱がしてほしいの？

客 そうじゃなくって、いや、そうなんだけど、僕、ミナちゃんとだったら住んでもい

いよここ。それで、子供たくさん作ってさ、あったかい家庭を築くの。

ミナちゃんは良い子だから、きつといい奥さんになるんだろうな。

ねえ、いつも何してるの？

ミナ いつも？寝て、起きて、ご飯食べて、セックスして、お風呂入る。

客 そうじゃなくて。

食べたいものとかさ、行ってみたい場所とか無いの？

ミナ 何でも買えるよ。行こうと思えばどこだって行けるし、高級レストランでお食事も、

有名ブランドの服も買えちゃう。でもあたし、そんなことより、ここが好き。

ここにるのが一番楽しい。

客 ねえ、ミナちゃん。楽しいときはどうするか知ってる？

ミナ え？

客 笑うんだよ。

ミナ ……

客 笑ってよ。楽しいなら。

ミナ、笑おうとするが顔が引きつる。

客 笑えよ！

ミナ、びくりと体を震わせる。

ぎこちないが、ゆっくりと笑顔を作るミナ。

客 そうそうそう。その顔。できるじゃない。

僕、ミナちゃんの笑顔に癒されるんだな。
だからずっと笑ってて。僕の前では。

客、嬉しさを隠しきれないように笑う。

【エリコ／7】

エリコ 誰かに見られてる気がする

誰かに聞かれてる気がする

誰かがしゃべっている気がする

誰かの物音がする

ボク エリコの顔が好きだ

エリコの声が好きだ

エリコの仕草が好きだ

エリコの思考が好きだ

エリコの・・・

ああ・・・エリコがもつと馬鹿だったらしいのに

エリコがもつと簡単だったらしいのに

エリコがもつと単純だったらしいのに

エリコがもつと・・・もつと・・・

エリコがボクの口を手でふさぐ。

エリコ ねえ、ねえねえねえねえ、きこえてる？

やめて、やめてねえ、やめて

ボク (手を振りほどいて) エリコ・・・

ボクが知らない君のこともつとみせてよ

ボクの方が君より君のことをどれだけ知っているか

教えてあげたいよ 今すぐにも

ねえ、知っているんだよ

君の知らない君を

君ならわかるだろ わかるだろ わかるだろ

わか れよ

エリコ・・・そうね

ぱっと、ボクは手を引きはがす。

陸に引き揚げられた魚みたいに、あるいは水の中で呼吸しているかのように何かつぶやきにならない息、呼吸が続く・・・

エリコ　ねえ、わたしがエリコじゃなくても、ゆるしてくれる？

ボク　君は

エリコ　嘘よ。わたしはずっとエリコでいてあげる。エリコにしかねないの

ボク　ねえ、みてて

ボクは、壁にマジックでのっぺらぼうのエリコの似姿を描き殴る。

ボク　ボクは彼女に色を付ける。

透明なところが無いように、後ろが透けてしまわないように、でも、なんべん塗っても、なんべん塗っても、彼女の色はできない。

（ボクが何度も、何色もの絵の具で塗りつぶした紙は、遠目から、ただの黒い紙に見える）

聞。聞。どこまでも、塗りつぶしたような闇が広がっている。

壁に、赤い口紅で、エリコの似姿を書く。

それを、唇でキスしてふき取っていく。

エリコが何かを小さく叫ぶ。が、ボクは無視して作業に没頭する。

ボク　ねえ、みてて

エリコ　聞こえなかったのかよ

お前の耳は、その眼は、鼻は何のためにあるんだよ
んな気持ち悪いのみせんじゃねえよ

ボクは、唇を真っ赤にして、嗤う。

空気の破裂音のような音。

客 ミナちゃん、今、したね？

ミナ 言っとくけど、おならじゃないから

客 え

ミナ 今出たのは、あたしが飲み込んで、飲み込んで、飲み込んできた空気。

客 ミナちゃんはぜんぶをボクに見せてくれるんだね

ねえ、どこまでが僕のものなの？

僕、ミナちゃんを独占希望

ミナ あんたのものじゃないの、もう

客 ねえ、こんなにしてたら、きつともうさ、ミナちゃんのナカ、

俺の形になってるよねえ？すぐくうれしいよ

ミナ (笑って) あなただけの肉人形

客 そんな言い方するなよ。僕はちゃんと、ミナちゃんの、ぜんぶを愛してるんだから。伝わってないなら、いくらだって伝えてあげるよ

客、ミナを壁に拘束し、ベルトで叩く。

客 ミナちゃんミナちゃん僕のことおぼえてくれた？

僕だよ、僕

ミナ まだ、足りないよ。あんたのことなんか、これっぽっちじゃ覚えらんない。

客 何考えてるの？

ミナ あなたのこと。ていうか感じてる。

客 ミナちゃんはさ、今は若くてキレイで、誰からも愛されるよね。でも、あと5年も

したらどう？誰も見向きしなくなるの、わかるよね？ねえ、それって不安？

ミナ あたしに・・・あたしに関わってくれさうと、そうじゃないとあたし・・・

客 僕は、ずーっと君の面倒をみてあげるからね。

ミナ あああ、そんなしたら、壊れる・・・

客 大丈夫だよ。ミナちゃんが壊れちゃったら、ちゃんと僕が直してあげるからね。

調べて、教えてあげるのが僕の仕事。

ミナちゃんも、もっと自分のこと知りたいでしょう？

ミナ
はい。

ミナね、一生治らない怪我をしたいの。
擦り剥いても、皮が引きちぎれても、骨折しても、
結局は全治何か月ですーって言って治っちゃうでしょ。
治っちゃうんだよ。治っちゃうんだな、これが。
ちゃんとあたしのこの現実には、見える形で残ってほしいんだよ。
もっと殴っていいんだよ？歯、折れたら記念にあげるし。
もっと痛めつけていいんだよ？その間、あたしは痛みだけに支配されてるって
身体中で実感できるから。
もっと締め付けていいんだよ？頭ぼうつとして、なんもわかんなくなりたいから
さあ！

客、ミナの上にまたがり、首を両手で絞めつける。

客 運命って、あると思うんだよね。

だって絶対ミナちゃんとは前にどこかで会った気がするし、
この先も離れる気がしない。
みんなぼくをこわがるんだ。
だから、どんなに仲良くなっても、逃げちゃうんだよね。
ミナちゃんは、逃げたりなんかしないよね？
ミナ しない、しません・あぁ、

ミナ、言葉にならない嬌声をあげる。

ミナ 一緒にいこうよお・・・

客 一緒に。ミナちゃんとずっと一緒に・・・

ミナ あんたしかいないんだよ

客、ミナの首を絞めながらつぶやく。

客 ずっと一緒にはいられないんだよ僕たちはわかるだろねえ・・・
でも僕はだからこそ君と一緒に生きる方法を考える

死んで一緒になんてなれないから

ミナ じゃあどうしたらいいの

間。

客 ミナちゃん、知ってる？こんな話があるんだ。

昔、女郎屋につながれた女郎は、

上客にその身を買収られることで、そこを抜け出すことができた。

僕は彼らと同じことができるのだろうか。

生活を買収与えてやることで、

ミナちゃんを自由にしてやれるだろうか

ミナ ミナ、難しいことよく分かんないよお・・・

もう、どうにでもして・・・

今、あたし、あんたでいっぱいだから、さ、

客 もちろん。

【エリコ／8】

エリコ ねえ 知ってる？わたしをとめられるのあなただけだった

(自分の首に手をかけ) ああああ苦し。

ね、手握って

ボク やめろよ

エリコ 握って

ボクが手を重ねると、エリコは片手を外してボクの手を片手でからめとって、自分の首を絞めさせる手伝いをさせる。

エリコ わかる 音 してるの

ボク わかるよ いつもより脈が

エリコ こうしてるとね、あなたの脈もきこえるわ

わたしたち 一緒に生きてるよね

ボク うん

エリコ もう何万回打ったんだろうね

あと何万回くらい あなたにこの音聴かせられるんだろ

間。

エリコ 殺して

ボク え

エリコ もう終わりたいの

ボク ……。

エリコ 知りたくなってしまいました。

ふと。ここで私があなたの前からいなくなったら、
あなたはいったいどうなってしまいうんだろうかって。
だからこれは、私たちの次のステージなんです。

ボク

ど・ち・ら・に・し・よ・う・か・な
て・ん・の・か・み・さ・ま・の・い・う・と・お・り

【ミナ／8】

客 さっきね、お店の人に言ってきた。

僕、ミナちゃんをロングコースで指名するよ。

時間は1日24時間。×(かける)、365日。期限は君が死ぬまで。

ミナ

なにそれ・・・あなた、頭おかしいんじゃないの
そんなことできるわけ・・・

客

ローン、さっき組んできたよ。

僕は死ぬまで、そのお金を払い続ける。分割で。ずっと。

いや、死んでも君にお金が入るようにはするよ。だってどっちが先に死ぬかなん
てわかんないもんね。

ミナ

なんなの？愛人契約ってこと？

客

違うよミナちゃん。君は今日から自由。

僕とは会っても会わなくてもいいしセックスしてもしなくてもいい。

ミナ

え？だってあんたそんなにお金積んでおいて・・・

客

僕は残念ながら24時間君を監視することも、傍にいてあげることもできない。

この社会で生きていくにはそれはかなわない。

だから、せめて、これぐらいはさせて。

君の人生を、支えることが僕の幸せ。

ミナ

どうしよう そんなだってあたし そしたらどうしていいかわかんないよ

客

ひとつだけ。

ミナ

え？

客

1つだけ、約束して。

ミナちゃんはこれから毎月、僕に宛てた手紙を書くこと。
内容は何だっついていい。今日は何を食べたとか、道端の花が綺麗だったとか。
ミナちゃんが、そうやって自分の言葉で書いたものを、僕は見たい。
それがね、約束だよ。

客、ミナに小指を差し出す。

ミナ 勝手ね。あんたほんと、勝手ね。

ああでも、あたしが欲しかったのはこれだったのかもしれない

ミナ、客の差し出した小指に自分の小指を絡め、「約束」する。

客 ミナちゃんに幸あれ。

客、去る。

ミナ、しばらくその場に呆然と佇む。

床に落ちている、すっかりひしゃげた紙人形を拾って、キスをする。

ミナ、部屋のカーテンを思い切り開ける。そこには窓はなく、壁があるだけである。

ミナ グッバイエリコ。

ミナ、紙人形をびりびりに破いて放り投げる。

白い紙が紙吹雪となって宙に舞う。

ミナ、エリコとボクに引きちぎったカーテンの布をばさりとかけて、おおう。

携帯電話の呼び出し音。

暗転――

エリコ、体重がないかのように軽やかに登場する。ゆっくりとロッキングチェアに深く座り、そのまま背もたれに体を預けていく・・・その姿はまるで玉座に座る王のようでもある。

明かりがつくと、ミナとボクがロッキングチェアを挟んで対峙している。黒い服を着たミナ、部屋に入ってくる。

白い布がかけられたロッキングチェアを見ながらぼんやりとつぶやく。

ミナ お姉ちゃん。ありがとう死んでくれて。

今まで生きてて今日が一番うれしい。

「あのひとの記憶まで支配してしまいたいの。思い出になった女、ぜんぶが私になるように私待てるわ。」

今種をまいておけば、もしも私がいなくなったとしても、ううん、私がいなくなったあとにも、

ずっとあのひとを支配できるでしょ」

ボク どなたですか、あなたは。

ミナ あたし姉に頼まれたんです、死んだ後の始末ってのを。こういうとき、家族って不便ですよね。

だって、ただ血がつながってる、それだけの理由で、それまで他人面していた姉の面倒をこうしてみてやらなきゃいけないわけなんですから。

遠くの家族より、近くの他人。

一番困っているときに必要なのは、励ましの言葉でも、ねぎらうやさしさでもない。

誰がそばにいて、現状を救ってくれるかです。

ボク 頼まれた

ミナ あなたを選ぶと思ってた。あなたにはこれでも感謝してるんです、

だって姉をあたしから遠ざけてくれたし、

ああ、あいつとは家族だけどやっぱり他人なんだって、何度も確認させてもらえたから。

なのにどうして。

これってどういうことなの。

死んだら顔くらい拌みに来てやろうかと思ったけど、

気が変わりました。

あたしね、一番いい思い出があるんです。
死ぬときはその思い出だけでもって、死んでいくって決めてるの。
あたしの心の、一番奥の、誰にも見つからない場所にしまっていて、
ときどきその扉をあけて、その思い出をのぞいてみるんだけど・・・
そうすると、生きてて良かったって改めて思うの。

ボク
それは本当にあったことなんですか
ミナ
そんなことどうでもいいじゃないですか

あたしだけがその思い出の美しさを知っていて、信じているのであれば、
他にはなにもいらなんでしょう。

・・・母が言った、あの不幸な女、自分のこと世界で一番かわいそうっていう顔
してたけど、死に顔はムカつくぐらい穏やかだったよ。

ボク
それで思い出したの、「1つだけでいいから、幸せな時間をみつけなさい」って。
みつけられたんだね

ミナ
死にたくなかった時に、みつけたの 皮肉なことだね
ボク
そういうもんじゃないかな
自分でもさ、わかんないんだ、
でもどんな人でも、誰でもかれでも、
抱きしめたい。抱きしめたいの。

ずっとね、皮膚がうずくの。
皮膚の摩擦、それだけなのにね、
相手の全部をまる呑みした気持ちになって
でも今にもむせ返りそうで
愛くるしい。

私が 私の上を かるがると 越えていくの。

待ってえ、待ってえ、
待ってよ私ッたら。

私に戻ってきて。

私はいつでもここにいるし、ここにしかないんだから。

ミナ、だんだん独り言をつぶやくようになっていく。

ミナ　みいはね、みんなのことだーいすきなんだよ？

そりゃさ、汚いとかあるよ、

今日はハズレだーとか、臭いとれねえけどどうしてくれるんだよこの野郎おととかかつ、ね、？

でもね、それすら、そんなことどーでもいいくらい、いっとおしいの。っていかもうもう、かわいくってしょうがないのね。

わかるう？エリコわかる？分かるだろお前なら。

わ　か　れ　よ。

ボク　不思議なことに、そのときボクにはミナが聖女のようにみえた。

ボクは神様とかよくわかんないけど、そのときのミナはまるで愛の化身みたいだった。

ミナ　エリコは気が多いの。だから気を付けて。

からだはゆるさなくせに、すぐに相手の心に侵入していく。

それがエリコなの。

ミナ　ねえ。気持ちよかったですよ。自分がどっか行っちゃったとき。

ボク　ミナは誰かに喋りかけているようだった。

ミナ　そうなの。それって「カイホウ」ってことなの。「ジユウ」になるの。

こわがらなくても、いいんだよ

なんにもないとこ、行こうよ。

ボク　わたしは、・・・

エリコならこう言います。

ミナ　ぼっかじゃないの

ボク　ボクは、ボクが死んだ後も、エリコにはずっと生きていてほしいと思いました。自分より長く生きていてほしい、そう思うのは当然ですよね。

だから、ボクは「エリコ」を教えなくちゃならないんです。

あたしに？

ボク　そうです。

ミナ　あんたさ、

ボク　はい？

ミナ　社会で生きていくってどういうことか、知らないの

ボク　ボクが知っているのは、エリコだけなんです。

頭の中をエリコでいっぱいにしたから、
他のことなんて、いらなくなっただけですよ。

ボクの腹の虫が鳴る。

ミナ お腹、すいたんじゃないの

ボク どうしてエリコが何も食べないのに、ボクだけ食べるんですか。

それはおかしい。

ミナ なに、あんたこのままここで干からびて死ぬの？

ボク ここで生きて、ここで死にます。

だって、ここなら、エリコが見てくれるから。

これからは、エリコに、ボクを教えたい。

暗転――

【エピローグ】

薄ぼんやりとした室内。

舞台中央手前側に、ロッキングチェアが揺れている。

徐々に明るくなっていき、そこに男が寝そべっているのがわかる。

男、椅子に身を預けて揺られながら、微かに手足を動かしている。

次の瞬間、けたたましいベル（あるいはブザーのような音）が空間に鳴り響く。

女、舞台奥から影がこぼれるかのように静かに現れ、ゆっくりと部屋を見渡しながら窓際の方に歩いていく。

いつの間にか音は鳴りやんでおり、無音の時間が訪れる。

女、窓の向こうを眺めている様子。

ボク （少し上ずった声で）・・・来てくれたんだね、エリコ

エリコ （ゆっくりと振り返り）しーっ。

ボクとエリコの間に、そして部屋に流れる時間は膨張し、

次第に影を色濃く落としていく。

エリコ ねえ

きつと、もうすぐ陽が差す頃だと思うの、
だつてほら…

だんだんあなたの顔が、はっきり見えてきた…

(ボクの名前を呼ぼうとするエリコ)

ボクは、ゆつくりと椅子から立ち上がり、歩を進めていく。
目の前のエリコも同じようにボクに近づいてくる。

時の融解――

――ボクは、自分自身の影と出逢う。

沈黙ののち、ボクは口を開く。

ボク エリコのことを話してみようかと思います。

エリコは気が付いたら傍にいて、ボクの心の中を軽やかに踏み荒らしていきまし
た。若い女性のようにも、時には恐ろしく年老いた老婆のようにもみえました…

ボクは時々つかえながらも、ひどく冷静に、エリコのことを語りつづける…。

ミナが、離れたところに表れる。手紙を持っている。

ミナ ミナです。私のことを、これから少しずつ、話していこうと思います。

生まれたとき私は未熟児で、保育器に入れられました。

みんな、あたしが死ぬんじゃないかって思ってたみたいです。

それは、姉も言っていました。そう、私には姉がいます。

姉は驚くほど私に似ていて、いつも私と一緒にでした――

ミナ、手紙を書き続ける。

終幕――